一八八四年八月三日（日）

南神寺(ドッキネーショル)において、校長、ラカール、ラトゥ、バララーム、アダル、およびシヴァプールからの信者たちと共に

シヴァプールからの信者とヨーガ・タットヴァの原理の話――クンダリニーと六チャクラ

タクール、聖ラーマクリシュナは、南神寺(ドッキネーショル)で昼の食事をすませた後、信者たちといっしょに坐っておられる。時間は二時ころ。

シヴァプールから吟遊僧(バウル)の一団と、バヴァニープルから信者たちが来ていた。ラカール、ラトゥ、ハリシュは、近ごろタクールといっしょに住んでいる。部屋にはバララームと校長もいる。

今日は日曜。一八八四年八月三日、スラボン月二十日、白分二日目。ジュラン祭(ヤートラ)の第二日目である。昨日、タクールはスレンドラの家においでになり、そこで学者シャシャダルと他の信者たちはこの御方にお会いした。(訳註、ジュラン祭(ヤートラ)――クリシュナとラーダーがジュラン＝ブランコに乗って遊戯(リーラー)した事に由来する祭)

タクールはシヴァプールの信者たちをそばに呼んでお話をなさる――

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに) 女と金に心を奪われているうちはヨーガはできないよ。普通

人間の心は、性器と肛門とへそにある。努力して霊の修行を積むとクンダリニーが目覚める。イダー、ピンガラー、それからスシュムナーが背骨に通っている。スシュムナーのなかに六つの蓮がある。一番下はムーラダーラ。それからスワディスターナ、マニプーラ、アナハタ、ヴィシュッダ、アジナー。これを六つのチャクラというんだよ。

クンダリニーが目覚めると、ムーラダーラ、スワディスターナ、マニプーラなどの蓮座をだんだん通りすぎて、心臓のところにあるアナハタに達して、そこにとまっている。そのときは、性器（リンガ）や肛門、へそから心が離れて、神の意識にめざめて光明（ひかり）を見る。修行者は感極まって、その輝きを見ながらこういう。〝何とすばらしい！〟〝何とすばらしい！〟

六つのチャクラを通りすぎると、クンダリニーはサハスラーラの蓮座に入って合体する。クンダリニーがそこへ行くと三昧（サマーディ）になるんだ。

ヴェーダでは、このチャクラを住地（ブーミ）と言っているね。七つのブーミだ。心臓は第四番目のブーミ。アナハタの蓮には十二の花弁がある。

ヴィシュッダ・チャクラは五番目のブーミにあたる。ここに心が昇ってくると、ただもう神の話をしたり聞いたりすることだけに一生懸命になる。このチャクラの場所は喉（のど）だ。十六の花弁をもつ蓮。このチャクラに心がとどいた人にとっては、世俗的な話――つまり女と金の話は大変な苦痛なんだよ！　そういう話を聞くと、彼はその場から立ち上がって行ってしまう。

それから六番目のブーミ、アジナー・チャクラだ。天上の蓮だ。ここにクンダリニーが来ると神の

相(すがた)が見えるようになる。だがひとつ、じゃま(幕)がある。ランタンの中の光のようなもので、光にさわったと思っても、ガラスの幕があるからほんとにさわっていないんだよ。

それから七番目のブーミ、サハスラーラの蓮だ。そこにクンダリニーがくると三昧に入る。サハスラーラにはサッチダーナンダ・シヴァがいなさる。あの御方がシャクティ(力)といっしょになっていなさるんだよ。シヴァとシャクティが一体になっていらっしゃるんだよ!

サハスラーラに心が昇って三昧境になると、もう外部の世界は無い。その人はもう肉体を保っていられない。口にミルクを注いでも、ミルクは外に流れ出てしまう。この状態でいると二十一日で肉体は死ぬ。黒い海に航(い)った船は二度と戻ってこない。(訳註――戻らない覚悟での旅立ちを黒い海に出ると表現する)

神の分身や神の化身(イーシュヴァラ・コーティ・アヴァターラ)たちは、この三昧の状態から降りてくることができる。信仰と信者を持っているので、そのために降りてこられるんだよ。その方のなかには、人々を導くための〝明知(ヴィジュニャーナ)の私〟か、または〝信者(バクタ)の私〟を神様は残しておいて下さる。その方たちの境涯はといえば、六番目のブーミと七番目のブーミの間でボートレースをしてるようなものさ。

三昧の後で、人によっては自分の意志で〝明知の私〟を残しておく。でも、その〝私〟には全く執着というものがないんだ。ホンの見せかけだけの〝私〟だ。

ハヌマーンは形ある神と形のない神(無相の大実在)に会った後、〝召使いの私〟をとっておいた。ナーラダたちのような人たち――サナカ、サナンダナ、サナータナ、サナトクマーラ、こういった方々も、ブラフマン智を得た後も〝召使いの私〟と〝信仰の私〟を残しておきなすった。こういう方々は大きな

船のようなもので、自分も向こう岸へ渡り、その上、多くの人々をも渡しておやりになるんだよ」

タクールはこのようにして、ご自分の境涯をそれとなく説明しておられるのだろうか？

〈パラマハンサ――無形の神を信じる人と有形の神を信じる人――タクールのブラフマン智獲得後の信仰――無限と遊戯の合一〉

聖ラーマクリシュナ「大覚者（パラマハンサ）には、無形の神を信奉する人と、有形の神（人格神）を信じる人とがある。無形の神を信じる人とはトライランガ・スワミのような人だ。こういう人たちは自分のことだけにかまけている。自分が覚ればそれでいいんだ。

ブラフマン智を獲得したあとでも、形ある神を信じている人は、人々を導くために神に対して信仰をもっている。水差しがふちまでいっぱいになると、別の容器（いれもの）に水が流れこんでいく。

神を慕い礼拝修行をして至聖をつかんだ人たちの口にする言葉は、どれもみな人々を導くためのものなんだ――皆の役に立つためにね。

水が欲しいので大へんな苦労して井戸を掘るだろう――カゴやスキを使って。井戸が掘り上がると、スキやその他の道具類を井戸の中に投げ捨てる人もいる。もう自分には必要ないんだからね！　けれども人によっては、井戸のそばに掘り道具を片付けておく。あとでほかの人が使うだろうと思って――。

ある人はマンゴーを人知れずコッソリ食べて、口のまわりをきれいに拭いておく！　ある人はほかの人に分けて食べさせる。人々を導くため、また、あの御方を味わうためにね。砂糖になるより、砂

糖を舐(な)める方が好きなのさ。

ゴーピーたちもブラフマン智をもっていた。でも、あれらはブラフマン智を欲しがったことはなかった。ある者は母親のような気持ち(バーヴァ)で、ある者は親友のような気持ち(バーヴァ)で、ある者は愛人のような気持ち(バーヴァ)で、ある者は侍女のような気持ち(バーヴァ)で、神様に対していたかったんだよ」

〔キールタンの喜びのなかで――聖ガウランガの名と大実母(マー)の名〕

シヴァプールから来た信者たちが一弦琴(ゴーピー・ヤントラ)に合わせて歌っている。はじめの歌で、「われらは罪人(つみびと)、われらを救え」という文句があった。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに)怯(おび)えたり脅かされたりして拝む――これが(神に対する)初心者の態度だ。あの御方をつかむ歌をうたえ――歓びの歌を。

(ラカールに向かって)ほら、あの日、ナビン・ニヨーギの家でうたった歌は実にすばらしかったねえ――。

ハリの名の甘露の酒に酔いしれよ――

悩みや苦しみのことばかり言うのはよくないよ。あの御方に浸りきって歓ぶこと、あの御方に我を忘れて酔うことだ」

シヴァプールの信者「おっしゃる通りでございます。で、あなた様のお歌をきかせていただけましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「わたしが歌うのかい？　そうさね、気が向いたら歌おうかね」

しばらくしてから、タクールはお歌いになった。歌っておられるあいだ中、眼（まなこ）を上に向けたまま、瞬（まばた）きもなさらない。

私はヴラジャに行く、乞食の身なりをして
バーラティーよ、腰布をめぐんでおくれ

（次の歌）

ガウルの愛の大波、わが身にかかりぬ
ガウルの聖き愛の波は
三界のすべてを浸し
ガウルの聖き愛の海に
われ　悦びて沈み入りぬ
ああ友よ　ほかの誰か
世の悲しみの泥沼より

ひきあげて救い給うか

(次の歌)

来たれ、友よ
白き御方の美しさを見よ
荘厳されたガウランガが紅に輝く
それを目にした者は法悦にむせぶ
ヴァリシャバヌナンディニーは
実に偉大な石工で
バンガダは偉大な職人だ

(次の歌)

沈め、沈め、沈め、美しき海に　わが心よ

一八八四年十月四日に全訳あり

ガウランガの名の次に、マーの名が唱われた——

シャーマの宝は誰でもつかめるか——

愚かな純い心では　どうして、どうして　とどかない

次に

わが心の黒蜂は、母なるシャーマの
御足なる、青き蓮華をひたむきに――

さらに

シャーマ母さま　玩具(おもちゃ)をつくり
カーリー母さま　玩具をつくり
五尺あまりの　玩具のなかで
おかしな遊びを　してみせる

あなたは玩具の　なかにいて
たくみな糸で　あやつるが
玩具はそれを　知らないで

自分で動くと　思っている

玩具がそれを　知ったとき
もうそのときは　玩具じゃない
信仰の糸で　母さまの
シャーマをさえも　縛ります

タクールの三昧、および宇宙の大実母との語らい――愛の原理

この歌をおうたいになりながら、タクールは三昧に入られた。信者たちは声もなく見守っている。間もなくやや平常に戻られて、マーと語らっておられる――

「マー、上(サハスラーラ?)からここに下りてきておくれ！　焦らさないでさ！　ほら、だまって坐って！

マー、それぞれに(前世からの影響が)あるから、こんなふうなんだね！　わたしはこれ以上、この人たちに何を言ったらいいんだろうね！　識別と離欲を実行しなけりゃ、どうにもならない。

離欲にはたくさん種類がある。そのなかのひとつは猿の離欲といって、この世の苦しみに嫌気が差して俗世を離れたしょうことなしの離欲だ！　これは長続きしない。もうひとつ、正真正銘の離欲が

ある。すべてが揃っていて何一つ不足はないのに、それでもこういうものはみな虚仮(こけ)だと知(さと)るんだよ。

離欲はいっぺんには出来ない。時期が来なくてはダメだ。だがね、真理の話を聞いておくのはいいことだよ。時期が来たとき思い当たる――〝あっ、聞いたことがある！〟とね。

それからもう一つ。こういう話を聞いているうちに、世俗的な欲が少しづつ減ってくるんだよ。酒の酔いをさますために、少しずつ酔いざましの水を飲むだろう。そうすれば、だんだん酔いはさめていく。

智識を体得する人は極(ご)く僅(わず)かだ。ギーターにあるが――千人に一人、あの御方を知りたいと望む。それを望む人が千人いる中でたった一人（つまり百万人に一人）、知ることができる」

タントラ派の信者「マヌッシャーナーン　サハッスレーシュ　カシュチッド　ヤタティ　シッダイェー（全き智識を求めて努力する者は、おそらく幾千人の中のただ一人）」（訳註――サンスクリットでギーターの文句を引用している――バガヴァッド・ギーター７・３）

聖ラーマクリシュナ「世俗的な執着が少なくなる分だけ、智識が増えていく。女と金への執着のことさ」

〔サードゥと交わること、尊敬(シュラッダー)、堅信(ニシュタ)、信仰(バクティ)、親愛(バーヴァ)、大情熱(マハーバーヴァ)、聖愛(プレーマ)〕

「聖愛(プレーマ)はすべての人間に生じるものではない。ガウランガは生じた。普通の人間にはバーヴァは生じる。その辺までだ。神の化身(アヴァターラ)たちには、この聖愛(プレーマ)が生じる。この愛が生まれると、世界は虚仮だと感じ

るばかりでなく、この体、この何より馴染み深く大好きな自分の肉体のことさえ忘れてしまうんだよ！

ペルシャの本（ハーフィズ）にあるが――皮膚の内部に肉、肉の中に骨、骨の中に髄、そのあともっといくつもあって――あらゆる人間の中で、聖愛は一番内側の奥の奥にあるんだよ！（訳註、ペルシャの本――ペルシャの詩人、ハーフィズの書）

聖愛によって、やさしくやわらかになる。この愛によってクリシュナは身も魂もとけて、体が三ヶ所曲がっておしまいになった。（訳註――クリシュナの首と腰と膝の三ヶ所を曲げた立ち姿を特にトリバンガと言う）

聖愛が生じるとサッチダーナンダをしばる綱を手に入れたようなもので、見たいときはいつでも綱をつかんで引っぱればいい。呼べばいつでもあらわれる。

信仰が熟してくるとバーヴァだ。バーヴァになるとサッチダーナンダを想って感動のあまり口もきけなくなる。一般の人はこの辺までだ。この上、もっとバーヴァが熟していくとマハーバーヴァになり、さいごに聖愛になる。ちょうど熟れないマンゴーと、よく熟れたマンゴーのようなものだよ。

純粋な信仰が何より一番肝心。ほかのものはみな、空しいものだよ！

ナーラダの讃詞の朗誦に応えて、ラーマは、『お前の願いごとを言いなさい。叶えてあげよう』とおっしゃった。ナーラダは、『純粋な信仰を――』と願った。そしてこうも言った。『ラーマよ、あなたの世にも魅惑的なマーヤーに惑わされないようにしてください！』と。ラーマは、『それは聞きとどけてあげるから、もっと何かほかのことも希みなさい』とおっしゃる。

ナーラダは、『ほかには何もいりません。ただ、ただ、純粋な信仰だけを！』

この〝信仰〟はどんなふうにして出来ると思う？　先ずはじめに、修行者や聖者と交際することで出来てくる。そういう修行者（サードゥ）といっしょにいれば、神様に対して尊敬（シュラッダー）の念がおきてくる。その次に堅信（ニシュタ）――神以外のことは聞きたくなくなる。あの御方の仕事をしたい、と思うようになる。

堅信（ニシュタ）のあとが信仰（バクティ）、その次にバーヴァ、マハーバーヴァ、聖愛（プレーマ）、そして真理の体得（本質をつかむ）。

マハーバーヴァと聖愛（プレーマ）は、神の化身（アヴァターラ）たちに生ずるもの。世間一般の人の智識と、信仰をもった人の智識と、神の化身たちの智識は、同じものじゃない。世間の人の智恵はランプの光のようなもので、部屋の中が見えるだけ。その智恵で飲食のことや、家事のきりもりや、体をととのえたり子供を育てたりする。

信仰者の智識は月の光のようなもの。内も外も見えるが、うんと遠いものとか、ごく小さいものなんかは見えない。神の化身の智慧は太陽のようだ。内も外も、小さいものも大きいものも――みんな見える。

それから、世間の人の心は泥水のようだよ、まったく。でも、濾紙（ろし）を使ってこせば、きれいになる。識別と離欲という濾紙だ」

こんどは、タクールはシヴァプールの信者たちと話をなさる――。

〔神の話を聞くことの必要さ――時期を待つこと――タクールの素直で気楽な境涯〕

聖ラーマクリシュナ「あなた方、何か質問があればおっしゃい」

信者「はい。お話をよく承(うけたまわ)っております」

聖ラーマクリシュナ「聞いておくことはいいことだよ。しかし、何事も時期が来なければだめなものでね。

熱の高い最中にキニーネを飲ませても効かないだろう? 熱冷ましの水薬を飲ませ、下剤をかけ、少々熱が下がりかけたところにキニーネをやらなけりゃね。また人によっては、放っておいても自然に熱が下がって、キニーネを飲ませる必要のないこともあるし――。

子供が寝るときに、『母ちゃん、オシッコのとき起こしてね』と言った。母親はこう答えた。『坊や、母さんが起こすことはないのよ。オシッコがしたくなれば自然に目がさめるから――』

いろんな人が此処に来るがね――ある人たちは信者といっしょにボートに乗ってやってきた。連中は神さまの話なんか好きでない。友達のヒジをつっついて、『いつ出ますか、もう行きましょうか?』なんてばかり言ってる。友達がどうしても立ち上がらないとこう言う。『じゃあ、私はボートに戻って待っていますから――』

はじめて人間として生まれた人たちは、肉体的な感覚が必要なんだよ。ある程度の経験をしなければ霊的な意識は目覚めない」

タクールは松林樹台(ジャウタラ)に行かれるようだ。半円形のベランダで笑いながら校長に話しておられる――。

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、さーてと、わたしはどんな境地だと思うかね?」

校長「はははは、そうでございますね。あなた様の表面は至って気楽で単純に見えますが、奥は

非常に深い。あなた様の境涯を知ることは、大へん難しいことでございます」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ、そうだよ。床の表面のようなものでね、人は表っ面だけを見て、床の下に何がどれだけあるかわからんのさ！」

チャドニーのガートで、バララームほか数名の信者がカルカッタへ戻るためにボートに乗っている。時間は四時になったところ。潮が引きはじめ、折しも南風が吹いてきた。ガンジスの河面はさざ波でおおわれている。

バララームの舟がバグバザールの方へ向けて進んでいくのを、校長は黙然として見送っている。

舟が見えなくなったので、彼は再びタクールのところへ戻った。

タクールは西のベランダから降りて来られる。ジャウタラにいらっしゃるのだろう。北西の空に美しい雲が湧いてきた。タクールは、「雨になるかもしれないから傘を持ってきてくれないか」とおっしゃる。校長は傘を持ってきた。ラトゥもそこにいた。

タクールは五聖樹の杜に来られた。ラトゥに話しかけていらっしゃる。――「お前、だんだんヤセてくるようだが、どうしたんだい？」

ラトゥ「何も食べられないのです！」

聖ラーマクリシュナ「それだけかい？　時候も悪いし、それに、あんまり瞑想をしすぎるんじゃないかな？」

タクールは校長に話しかけられた。

聖ラーマクリシュナ「お前にひとつ、頼みがあるんだよ。バブラームに言ってくれないかね――『ラカールの留守中、一日、二日でもときどき此処に来ているように』って。さもないとわたしは我慢できないんだよ」

校長「承知いたしました。そう申しましょう」

素直にならなければ神をつかむことはできない。タクールは、「バブラームは素直だと思うかい?」と校長にお聞きになるのであった。

〔ジャウタラ及び五聖樹(パンチャバティ)の杜にてタクールの気高い姿を見ること〕

タクールはジャウタラから南に向けて歩いて来られる。校長とラトゥは五聖樹(パンチャバティ)の杜に立って、北を向いてタクールのお姿に見入っている。

タクールの西側に新しい雲が絵のように美しく空をかざり、ガンガーの水に映っている。そのため、河の水は濃い青黒色にみえる。

タクールはこちらに歩いてこられる。肉体をまとった神ご自身が地上の信者たちのために、罪障を滅尽するものとして、また蓮の上に生まれたヴィシュヌのような人として、ガンガーの岸辺を逍遥(しょうよう)しておられるのだ! 今ここに在(お)られるのだ! そして、樹も草もつる草も、庭の道も、寺院も神像も、召使いたちも門番たちも、そのあたりのチリの一つ一つまでもが、こんなに歓喜に充ち満ちているのだ!

ナヴァイ・チャイタニヤ、ナレンドラ、バブラーム、ラトゥ、モニ、ラカール、ニランジャン、アダル

タクールはご自分の部屋に戻ってお坐りになった。パララームがマンゴーを持ってきていた。タクールはラーム・チャトジェー氏に向かって、「あんたの子供たちにマンゴーを持って行っておやり――」とおっしゃる。部屋にはナヴァイ・チャイタニヤ氏が来て坐っている。彼は赤い色の下衣（カポル）を着ている。

北の長ベランダで、タクールはハズラーを相手に話しておられる。学僧（ブラフマチャーリー）がタクールにハリタル（石黄（せきおう））を粉にした薬を持ってきて差し上げたのだが、その人のことが話題になっている。

聖ラーマクリシュナ「ブラフマチャーリーの薬はとてもよく効（き）くよ。あの人の目利きはたいしたもんだ」

ハズラー「ですが、かわいそうに、すっかり世間に巻き込まれて――。どうしようもない！あのナヴァイ・チャイタニヤは、コンナガルから来られたのですよ。ですが、あの人は在家のくせに赤いカポル（カポル）なんか着込んで！」（訳註――在家者は白い下衣を着ることになっている）

聖ラーマクリシュナ「どう言ったらいいんだろう。わたしから見れば、神さまご自身がこうしたすべての人間の姿をとって現れていなさるんだ。だから、誰に対しても何も言うことは出来ないんだ」

タクールは、再び部屋のなかにお入りになった。ハズラーと、ナレンドラのことを話しておられる。

ハズラー「ナレンドラはまた、訴訟事件にかかずらっておりますね」

聖ラーマクリシュナ「力(シャクティ)を認めないんだよ。肉体をもっているかぎりは、シャクティを認めなくちゃいけない」(訳註――ナレンドラは信者を庇護する力(シャクティ)=カーリー女神を認めていないことを言っている)

ハズラー「彼はこう言うのです――『もし自分が認めたら、皆が認めるだろう。だから、どうしても認めるわけにはいかない』と」

聖ラーマクリシュナ「あんまり極端なのは感心しないね。現在、シャクティの管轄内にあるというのに――。裁判官でさえ証言するときは、証言台まで下りてきて立たなくてはならないからね」

タクールは校長に、「お前、ナレンドラに会ってるかい?」とおっしゃる。

校長「はあ、最近は会っておりません」

聖ラーマクリシュナ「会っておいで。そして、馬車に乗っけて連れてきておくれ。

(ハズラーに向かって)そうだ、彼と此処(ここ)の人(タクール自身)とは、どういう関係なんだろうね?」

ハズラー「あなた様に助けていただいているんですよ」

聖ラーマクリシュナ「バヴァナートは? 前世からの傾向(ちから)(サムスカーラ)がなけりゃ、此処にこんなに通ってくる筈がないだろう? そうだ、ハリシュとラトゥは瞑想ばかりしているが、いったいあれはどういうつもりなんだろう?」

ハズラー「ほーう、瞑想ばかりしてるんですか? あなた様にお仕えするのも同じことなのに――」

聖ラーマクリシュナ「そうだろう! あれらが去(い)って、誰か別の人が来るようになるかも知れん

よ」

〔モニに対する教訓――聖ラーマクリシュナのサハジャの境地〕

ハズラーは部屋から出ていった。まだ日暮れには間がある。タクールは部屋のなかで坐って、モニ（校長）と差し向かいで話をしておられる。

聖ラーマクリシュナ「――ところで、わたしが半三昧（バーヴァ）で言うことに、皆は関心を持っているんだろうかね？」

モニ「はい、大へんな関心を持っております」

聖ラーマクリシュナ「皆はどう思っているんだろう？　半三昧（バーヴァ）の様子を見て、どんなふうに感じているんだろうね？」

モニ「それはこういうことで――。智慧と愛と、完全な離欲が一つになって、その上、実に自然で楽々としたご様子。内部（なか）を大きな船が何度となく通りすぎるのに、それでいて、見かけは何気ないご様子なのです！　そのことは多くの人にはわかりません。でも、二、三の者は、そのご様子にたまらなく魅せられてしまうのでございます」

聖ラーマクリシュナ「ゴシュパラ派（ヴィシュヌ派の一つ）では神のことをサハジャ、つまり素直なるものと言っている。そしてこう言うんだよ――『サハジャ、つまり素直にならなければ、神（サハジャ）はわからない』と」

〔聖ラーマクリシュナと利己心(エゴ)や慢心(プライド)――私は道具、神が使い手〕

聖ラーマクリシュナ「ときに、わたしには利己心があると思うかい?」

モニ「はい、少しあります。お体を保ち、神への信仰を味わうために、信者たちに真の智慧を教えるためにです。それも、あなた様は神に祈って、やっと残しておおきになるのです」

聖ラーマクリシュナ「わたしが残しておくんじゃないよ。あの御方が残しておいて下さるんだよ。それで、半三昧(バーヴァ)になったときにはどうなのかね?」

モニ「あなた様が先ほどおっしゃいましたように、第六ブーミに心が上がって神のお相(すがた)を見ていらっしゃいます。そのあとでお話をなさるときは、第五ブーミに心が下りてこられます」

聖ラーマクリシュナ「あの御方が、すべてのことをなさるんだよ。わたしは何も知らないんだ」

モニ「そうです。まさにそういうところが、私共を無性に惹きつけるのでございます」

〔何故こんなに経典が多いか?――全ての宗教が真実(Why all Scripture all Religions are true)――聖ラーマクリシュナと経典間の争いの仲裁〕

モニ「経典に二通りに書いてございます。あるプラーナには、クリシュナがチッダートマ(真我(プルシャ)=男性原理)であり、ラーダーがチットシャクティ(物質自然(プラクリティ)=女性原理)であると言っておりますが、ほかのプラーナでは、クリシュナ即ちカーリーであり、根元造化力(アディヤシャクティ)であると言っておりますが――」

聖ラーマクリシュナ「デーヴィー・プラーナのことだね。それによると、カーリーこそがクリシュナになっているのだと言う。

でも、それがどうしたい！　あの御方は無限だし、道も無限だ」

この言葉を聞いてモニは二の句が告げなくなり、しばらくの間黙りこくっていた。

モニ「わかりました。あなた様がよくおっしゃいますように、〝屋根に上がる〟ということですね。どんな方法でもいいから、上がってしまいさえすればそれでいい――綱でも竿でも、何を使ってもいいということでございますね」

聖ラーマクリシュナ「わかったとみえるね。それが神様のお恵みというものだよ。神さまのお恵みがなけりゃ疑問はとけないのだ。

こういうことだよ――どんなやり方でもいいから、神への信仰を持つことだ。神様を好きになることだ。いろいろと物知りになっても何になる？　一つの道を歩きつづけて、あの御方を慕えるようになれば、それでいいんだよ。好きになれば、やがてあの御方をつかめるようになる。その後で、もし必要とあれば、あの御方自身が何でもみな教えてくださる。神様が好きでたまらなくなればいいんだよ。何だかだと考える必要はない。マンゴーを食べに来たのなら、マンゴーを食べろ。枝が何本あるか、葉っぱが何枚あるか、そんなこと勘定する必要はないじゃないか！　ほら、ハヌマーンの心掛けだよ――『私は日の吉凶も知らない。星占いも知らない。ただ完全円満なラーマのことだけを想っている』と」

〔世間を捨てることと神をつかむこと――信仰者は貯えずともヤドリッチャー・ラーバ〕

モニ「現在、私はこんなふうに願っております。仕事がだんだん減ってきて、心が神に集中できる

ようにと」

聖ラーマクリシュナ「アハー、そうなるともさ！　だがね、智者は世間に住んでいても、何事にも巻きこまれずにサッパリと暮らしているよ」

モニ「そうでしょうか。でも、世俗に溺れることなしにこの世で生活するには、何か特別な力が必要でございますね」

聖ラーマクリシュナ「うん、そりゃそうだとも。でも、もしかすると、お前自身が世俗的なものに惹かれているんじゃないのかな。自分では気がつかないかもしれないけれどね。

クリシュナは、聖女（シュリー・マティー）（ラーダー）の胸（ハート）の中に在（い）なさったのだが、自分から望んで人間の姿になって遊戯三昧だ。今から祈っていれば、よけいな仕事はだんだん減ってくるさ。

そして、心がいろんなものにとらわれなくなれば、それでいいんだよ」

モニ「外面的なものも捨てなければ、心がとらわれないようにはなりません。高い境地に達するためには全部捨てなければ――。精神的にも外面的にも――」

タクールは黙然としておられる。――再び話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「離欲（ヴァイラーギャ）のことは、さっきの話でよくわかったかい？」

モニ「はい、よくわかりました」

聖ラーマクリシュナ「離欲とはどういうことか、言ってごらん」

モニ「〝離欲（ヴァイラーギャ）〟とは、世俗的な欲を捨てるだけのことではありません。神を渇仰して、世俗の欲

から離れること。即神離欲、ということでございます」

聖ラーマクリシュナ「そうだよ。うまく説明できたね。世間で暮らしていれば、金の要ることは確かだよ。でも、そのことをあんまりクヨクヨ考えるな。ヤドリッチャー・ラーバ――これがいいんだよ。貯めることなど考えるな。心も命も、あの御方に任せきっている人たち、つまり神の信者で神に頼りきっている人たちは、そういうことをあまり考えないものだよ。無理なく入ってくるものを有難く頂戴して、出て行くものはスンナリ出してやる。一方から金が入ってくれば、必ず一方に用ができて出ていく。これをヤドリッチャー・ラーバというんだよ。ギーターに書いてあるだろう。これが一番いいんだよ」（訳註、ヤドリッチャー・ラーバ――〝無理なく入ってくるもので満足し……〟バガヴァッド・ギーター４‐22参照）

〔ハリパダ、ラカール、バブラーム、アダルたちについて〕

タクールはハリパダの話をなさる――「ハリパダは、この間やってきたよ」

モニ「はははは、ハリパダは物語の語り方をよく知っておりますよ。プラフラーダの伝記だの、聖クリシュナ誕生譚だの、実によい節回しで語ります」

聖ラーマクリシュナ「そうだねえ！　あの日、あの目を見たところが、すこし赤くなっているようだった。『瞑想のしすぎじゃないかい？』と言ったら、恥ずかしそうに下を向いていたっけ。それでわたしは、『あまり無理するなよ！』と言ってやった」

日が暮れた。タクールは大実母(マー)の名をとなえたり、黙想したりしていらっしゃる。

間もなく、神殿では献灯(アーラティ)がはじまった。スラボン月の白分二日目、ジュラン祭(ヤートラ)の第二日である。月が昇った！　寺も境内も庭も、よろこびに溢れている。夜の八時になった。部屋ではタクールが坐っておられる。それにラカールと校長がいる。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かって)ババラームが言うんだよ――『俗世の生活！　何たる有様！』って」

校長「彼のは聞きかじりでございますよ。ババラームは世間のことは何も知っちゃおりません」

聖ラーマクリシュナ「そりゃそうだ。ニランジャンを見たかい？　ほんとに素直で純粋な子だねえ！」

校長「ほんとにそうです。彼の容姿(すがた)のいいこと――。全くチャーミングでございますね。それに、あの目つきと言ったら、まあどうでしょう」

聖ラーマクリシュナ「目ばっかりじゃない、何もかもだよ。あれを結婚させようという話を聞いてこう言ったそうだ。『なぜ私を俗世に突き落として、溺れさせようとするんですか?』と。ハハハハハ。えーと、聞くところによれば、外で働いてクタクタになっても、かみさんのところに帰ってくれば、身心ともに休まって楽しくなるそうだね?」

校長「はあ、そう思い込んでいる連中にとっては、その通りでございましょう。(笑いながら)ラカールさん、これは、私たちを試すような質問ですな」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ。母親たちは、息子に木陰をあてがってやればひと安心だと言っている――世の中は目も眩(くら)むほど烈しい陽射しだから、妻という木陰を用意してやろうというワケだ」

校長「はい。世間にはいろんな親がございます。悟った父親は息子たちに結婚をすすめはいたしません。もっとも、結婚させた方がよけい気が楽になって、もっと深く悟れるかも知れませんが――」

タクールは大笑い。

〔アダルと校長、カーリーを参拝――アダルの聖地チャンドラナートとシータークンダ訪問の話〕

アダル・セン氏がカルカッタから来て、額(ぬか)ずいて師を拝しごあいさつ(プラナーム)をなさった。彼は僅かの間坐ってから、カーリーに参拝するため神殿の方に行った。

校長もカーリーを参拝した。そのあとでチャドニーのガートへ行って、ガンガーの堤に腰を下ろした。ガンガーの水は月光を浴びてキラキラとかがやいている。今しがた満潮になったばかりだ。校長は独りで坐って、タクールの驚くべき言動をあれやこれやと思いめぐらしている。あの方のすばらしい入三昧の様子。絶え間ない神との語らい。信者に対するたくまざる愛情。子供のような言動。こうしたものを思い浮かべ、そして考えるのだった。――あの方は、最高神が信者のために肉体をとって現れたお方に相違ない。

やがて、アダルも校長もタクールの部屋に戻った。アダルはチッタゴンに仕事のため滞在していたことがある。そして、チャンドラナートの丘、その近くの聖地やシータークンダの話をした。

アダル「シータークンダの水の上には、火焔が舌のようにユラユラ燃えているのでございますよ」
聖ラーマクリシュナ「そりゃ又、どういうわけでそうなるんだい？」
アダル「水に燐(りん)が含まれているのです」
ラーム・チャトジェー氏が部屋に入ってきた。タクールはアダルに、彼のことをほめて聞かせていらっしゃる。――「ラームが来たよ。さあ、わたしらはもう何も心配しなくていい。ハリシュやラトゥも呼んできて、皆にゴハンを食べさせてくれるよ。あれらはきっと、どこかで瞑想しているんだろう。ラームが呼んで連れてきてくれるよ」